

〈学会大会報告〉

比較舞踊学会 第33回大会報告

大会実行委員長 中村恭子

日時 2023年9月30日(土) 9:25～17:00
テーマ 舞踊における型と創造
会場 順天堂大学 本郷キャンパス 7号館 (A棟) 1階カンファレンスルーム

《第Ⅰセッション》

座長：佐々木玲子（慶応義塾大学）

1. 成長期バレエ学校生徒の疼痛の緩和治療について
—超音波放射による疼痛緩和治療2例—

里見悦郎（日本赤十字社）

2. バレエ・ポーズの認知評価に関する一考察
—男性上級者と女性上級者の比較分析—

村松香織・佐藤弘幸・小野瀬直樹（東海大学）・大岡直美（執行バレエスクール）・
広川美津雄（東京日野国際学院）・井上勝雄（株式会社ホロンクリエイト）

《第Ⅱセッション》

座長：波照間永子（明治大学）

3. 舞楽「納曾利」の下肢動作について
—追足（おいあし）を中心に—

鈴木 祥江（三田徳明雅楽研究会／学習院大学）・三田徳明・三田千尋

4. 雅楽の上演速度を規定するもの

三田徳明（学習院大学／三田徳明雅楽研究会）

《第Ⅲセッション》

座長：今西ひとみ（帝京科学大学）

5. 舞楽「納曾利」と「落躰」の伝承と変容

三田千尋（和洋女子大学大学院／三田徳明雅楽研究会）・三田徳明・鈴木祥江

6. 琉球舞踊にみられる囃子詞と所作に関する一考察
～古典女踊り12作品の所作分析より～

樋口美和子（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所）

7. 体育科のダンス等での「鑑賞」と「発表」の位置づけと変遷

服部愛（早稲田大学スポーツ科学研究科）

8. 型を失くし、創造だけで独自のバレエを展開し続ける日本人
—農耕民族がバレエ教育を開始するための身体づくり—

砂原伽音（カノンバレエアカデミー）

〈臨時総会〉

〈特別講演 ワークショップ〉

司会：中村恭子（順天堂大学）

まねぶこと、まなぶこと
—舞台芸能の伝承における〈模倣〉—

野村太郎（狂言方と泉流能楽師）

《第Ⅳセッション》

座長：澤田美砂子（日本女子大学）

9. ダンカン・ダンスの運動特性
—ポルカの指導法—

森田玲子（明治大学大学院）

10. フラメンコとクラシコエスパニョールにおける振り付けの創作と型について

荻山幸子（武蔵野美術大学）

11. 大人初心者のバレエ・レッスンの始め方
—重心移動、そして軸を作る—

大岡直美（執行バレエスクール）

12. 舞踊作家は振付過程で何を語るのか（2）
—ダンサーの踊り方—

杉山千鶴（早稲田大学）

《第Ⅴセッション》

座長：弓削田綾乃（和洋女子大学）

13. 変容する民族舞踊
—福島県いわき市のフラをめぐる考察—

目黒志帆美（東北大学）

14. 「さんさ」踊り指導法

近藤洋子・中永真吾（整体&民俗舞踊研究所）

15. ねぶた祭りに見られる「荒馬」の踊りの比較

沼倉学・佐藤節子（宮城教育大学）

16. 小鹿野歌舞伎三番叟の場面構成・移動経路・動作などから読み解く「大和座」の型

安倍希美（北里大学）

〈若手研究奨励賞表彰式〉

特別講演 ワークショップ

まねぶこと、まなぶこと—舞台芸能の伝承における〈模倣〉—

野村太一郎（狂言方と泉流能楽師）

特別講演・ワークショップとして、狂言方と泉流能楽師の野村太一郎氏をお招きし、「まねぶこと、まなぶこと—舞台芸能の伝承における〈模倣〉—」について実技を交えながらご講演いただいた。狂言特有の喜怒哀楽の表現について、先生のご発声や身体づかいを真似て実践する試みにより、「まねぶ」という伝統芸能の伝承方法を肌で体得する機会となった。

野村太一郎氏は父に故・五世野村万之丞（八世野村万蔵）、祖父に初世野村萬（人間国宝）、大叔父に二世野村万作（人間国宝）と故・野村幻雪（人間国宝）を持つ。現在は二世野村萬斎に師事。2022年の能狂言『鬼滅の刃』で「嘴平伊之助」役を務めたほか、2020年に新作能「白雪姫」を、2022年には「楽劇大田楽」を上演。次代を担う若手狂言師として、新しい表現方法で狂言の魅力を広く伝えている。

〈講演概要〉

能と狂言

狂言(きょうげん)は、日本で最も古い芝居の一つ。能と狂言とを合わせて「能楽」と言い、能楽は日本の重要無形文化財に指定、ユネスコの無形文化遺産にも登録されている。能が静かで真面目な内容であるのに対し、狂言は身近で無名な一般人が登場する芝居で、大げさな動きが多く、楽しい喜劇である。

まねぶこと、まなぶこと

狂言師の芸能の伝承方法は「真似る」である。「学(まな)ぶ」という言葉は「まねぶ(真似をする)」という言葉を起源としているが、狂言はまさしく〈まねび〉を代々繰り返すことで室町時代から伝えられてきた。太一郎氏自身も幼少の頃から「真似(まね)る」ということを通して学んできたという。

狂言の表現の特徴と即興性

狂言は〈喜〉〈怒〉〈哀〉〈楽〉の感情表現が豊かな芝居である。狂言の技法を用いて〈お決まり〉の表現をすることで、観客が遠目に見ても喜怒哀楽の感情表現がわかるようになっている。

古典芸能は固定化された舞台と思われがちだが、台詞を繰り返す回数や動作のタイミングについて演者の判断に委ねられている部分が随所にある。こうしたアドリブのことを「具合」、「あしらい」、「見計らい」と呼ぶ。狂言では「見計らい」の部分が多くあり、舞台の醍醐味の一つとなっている。

〈ワークショップ〉

実技は狂言特有の表現を中心に、犬の鳴き声「ビョウビョウ」の実演に始まり、猿の鳴き声「キャーキャー」や身近な登場人物の台詞「この辺りの者でござる」、笑い声「はあーはっはっ」などを、太一郎氏のお手本を〈まねび〉、座位のまま実践・体験した。何回かお手本と〈まねび〉を繰り返したが、はじめて取り組んだ狂言特有の表現をお手本のように演じるのは容易ではなく、伝承芸能の洗練された表現技法と〈まねび〉の奥深さを体感できた。



学会賞「若手研究奨励賞」

第33回大会より、前々会長の森下はるみ先生（お茶の水女子大学名誉教授）のご寄付を基金として、若手研究者の育成を目的に、学会賞「若手研究奨励賞」が創設された。

「若手研究奨励賞」は当該年度の学会大会における一般発表者のうち、優れた研究発表を行った会員に対して、若手研究奨励賞選考委員会によって選出された者（1～2名）に授与される。授賞式は学会大会の閉会式において執り行われ、表彰状と副賞（3万円）を授与される。

受賞対象者の条件は、以下の3点である。

- (1) 当該学会大会において、登録演題の研究筆頭者かつ発表者であること
- (2) 原則として、発表時の年齢が40歳未満であること
- (3) 過去に若手研究奨励賞を受賞していないこと

参照：比較舞踊学会HP「第33回大会情報」【別紙】学会賞「若手研究奨励賞」規則

33回大会ではプログラムの《第Ⅲセッション》の4演題が受賞対象者であった。

厳正なる審査の結果、「琉球舞踊にみられる囃子詞と所作に関する一考察～古典女踊り12作品の所作分析より～」を発表した沖縄県立芸術大学芸術文化研究所の樋口美和子さんが記念すべき第1回の受賞者となった。

当該研究は、琉球古典音楽の一流派である琉球古典音楽野村流保存会の三線音楽楽譜『声楽譜付 舞踊曲工工四』から古典女踊り「伊野波節」「諸屯」「柳」他、全12作品の節、歌詞及び囃子詞を整理し、挿入箇所と所作との関係性について考察したものであった。これまで注目されてこなかった琉球舞踊の囃子詞について、古典女踊り作品の歌詞にほとんど必ず挿入されており、特に歌詞本体の語句後に挿入される場合が多いことを明らかにし、また、語句後に挿入される囃子詞において独自所作がみられる場合が多いことを明らかにした点が評価された。



なお、沖縄では県民の功績を県内の新聞社に報告して記事にしてもらう慣習があるとのことで、樋口さんの受賞について琉球新報10/15および沖縄タイムズ10/20に記事が掲載された。



琉球新報（10月15日付・19面）



沖縄タイムス（10月20日付・19面）